



Title	弥生時代の土器と社会
Author(s)	中村, 朋子
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45719
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	なかむら ながとも ともこ
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第 19124 号
学位授与年月日	平成17年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科文化形態論専攻
学位論文名	弥生時代の土器と社会
論文審査委員	(主査) 助教授 福永 伸哉 (副査) 教授 都出比呂志 教授 小林 茂 助教授 高橋 照彦

論文内容の要旨

粘土を用いて作られた土器は、多くの地域で普遍的な存在であるとともに製作者のさまざまな意図を形や文様に反映させることができると、物質資料の背後に社会の動きを読みとる考古学研究においては、つねに中心的な検討対象となってきた。本論文は、弥生土器の文様、製作技法、製作コスト、規格性、器種構成などの推移を検討することによって、背後にある弥生社会の特質やその時期的な変化過程に迫ったものである。全体は6章構成で本文分量は400字詰め原稿用紙換算約600枚、これに80頁分の図表を加えてA4判235頁の体裁をとる。

論文の目的と研究方法を示した第1章に続き、第2章ではまず議論の前提となる土器編年の枠組みを北部九州から近畿までの西日本全域にわたって整理した。この時間軸をふまえて、第3章では製作技法、装飾文様、丹塗り彩色などの情報が多くなる弥生中期を対象に、土器の地域色のあり方を検討する。製作技法の点では、甕形土器の叩き成形や表面の削り仕上げという共通性によって中期中葉の近畿中部に広い地域色が形成されたことを説く。また、装飾文様という要素については、瀬戸内から近畿に広がる凹線文を取り上げた。まず凹線文の出現地を岡山平野から播磨平野にかけての地域と理解した上で、凹線文を施文した各地の土器の種類や施文部位を比較した結果、その受け入れ方に山間部と平野部で微妙な差が認められるとし、土器装飾という非実用的な要素においては製作技法とはまた違ったレベルの地域色が存在することを指摘した。丹塗り彩色の点から北部九州の弥生土器を分析した作業からは、手間をかけた彩色土器が顕著な福岡平野や糸島半島とそうでない地域との間に中心周辺関係が形成されていることを推定し、土器の違いが地域間の較差に結びつかない瀬戸内や近畿との違いを強調し、その背後に社会構造の差を読みとろうとした。

第4章では、土器作りの諸工程にかけられたコストを、素地作り、成形、焼成、形や大きさの規格性といった観点から検討する。そして、弥生前期には比較的コストが低いが中期になると成形や施文が複雑化してコストが増し、つくりが粗雑化する後期をへて終末期には近畿、吉備、山陰などの特定地域でとりわけ精緻でコストのかかった土器が再び現れるという推移を示し、社会変化とのかかわりを論じた。また、中期には集団のアイデンティティ表示のため、終末期には交易品的な価値を持った優品製作のためというように、コストをかける理由は異なるものの、そうした時期に製作された土器は移動や流通が活発になることを見いだした。

第5章では、土器の持つ食器としての機能に着目して器種構成や食事方式の変化を検討した。その結果、弥生中期までに多様化した器種が後期には鉢形土器を中心とする構成に整理統合されることを指摘し、食膳具としての脚付木

製台が同じ後期以降に出現するという理解を加えながら、中期までの共同性の強い食事方式から後期になると階層差などを表現しうるような個人別の食事方式へ変化するという見通しを示した。

以上の検討に基づいて第6章では、土器から見た弥生社会の変化過程を総括的に検討し、生業と深く関わる大陸からの影響を受けて土器作りが激変した弥生開始期、農耕社会が安定して集団のアイデンティティを土器要素に強く反映させた中期、大陸からのあらたな文化的影響のもとに実用性を重視した効率的な土器生産が顕著となった後期、精緻な土器の生産や移動から社会の複雑化と地域の政治的動きが読みとれる終末期という4段階を提示して、弥生社会と土器のあり方の変化の間に強い相関が認められることを指摘した。

論文審査の結果の要旨

土器を対象とした研究は考古学では基本的な分野であるが、発掘調査の進展によって土器資料の蓄積が続くわが国のような場合には、資料の全体的な概要をつかむことすら年々難しくなっている。本論文の最大の評価点は、申請者が明確な分析戦略と労をいとわない粘り強さを持って西日本の膨大な資料をつぶさに観察し、弥生土器の文様、製作技法、製作コスト、規格性、器種構成といった多様な要素の推移を明らかにし、さらにそれらを社会の変化過程と結びつけて整合的に理解する視点を打ち出したことである。

とりわけ、土器の製作技法の地域色と施文の地域色とが異なる原理で発現していることを実証し、機能面と象徴面にかんする土器作りの情報の伝わり方が違っていたことを指摘した点は重要である。また、土器作りにかかるコストという視点で前期から終末期にいたる長期の変化をあとづけ、背後にある社会構造や生活様式の変化を読みとった点は、独創性ゆたかなアプローチとして評価できる。さらに、調理方法や食事方法に見られる変遷の諸段階を整理した上で供膳形態や食器器種構成が後期に大きく変化することの意義を明確にした点も、研究の現状をさらに前進させる成果といえる。なお、これに関連しておこなった脚付木製台の型式学的分析は、中国における事例をもふまえた総括的なもので、この種の器物の基礎研究として今後つねに参照されるであろう。

これらの評価点がある一方で、本論文にはなお改善を要する点が認められる。まず資料分析については、対象地域や対象資料ごとに作業の精粗の差が大きく、それが結論の説得性を減じている場合が見受けられる。また、土器の持つ多様な側面のそれぞれに着目した各章の考察が相互の脈絡をやや欠いているため、それらをまとめ上げて弥生社会論に結びつける際の論理構成に時に無理が生じている点も惜しまれる。

とはいえ、その丹念な資料分析と資料の背後にある社会を読み解こうとする積極的な姿勢は高く評価でき、上述の問題点についても今後の研究において十分に克服してゆける能力を有していると判断できる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するに足るものと認定する。